

「誘拐のフーガ」

登場人物

- ・久我誠（39）
商社の営業マン。
- ・久我真理菜（41）
誠の妻。ネイリスト。
- ・久我恵（11、13、15）
誠と真理菜の二人の娘。
- ・中原絵馬（11、13、15）
恵の親友。
- ・中原晴彦（45）
絵馬の父親。
- ・中原祖父
晴彦の父親。
- ・野田刑事（58）
誘拐事件の担当刑事。
- ・松永（43）
ネイルサロン店長。

○ T … 2 0 1 7 + 2 0 1 9 久我誠

○ 渋谷・ハチ公前（雨）

傘も差さず、雨に濡れるに任せて、
バラの花束を手にした久我誠（39）
が誰かを待っている。やつれた表情。
いつの間にか、赤い傘を差した女子
中学生・中原絵馬（13）が隣に来て
いて、

絵馬「（小声）悪質なイタズラです」

彼女は傘で隠すようにして誠にスマホ
を見せる。その画面には動画配信サイ
トのライブ配信画面が映っていて、
少し離れたところから誰かが誠をスマ
ホで隠し撮りしている。

絵馬「何度も問題を起してるライブ配信者
なんです。たぶんニュースで失踪事件を
知ってアクセス数稼ぎに使おうと考えたん
だと思います。久我誠さんですよ？
あいつはあなたの娘さんの情報なんて知り

ません。イタズラなんです。最低の奴ら」

誠、スマホの配信画面に映っている場所から撮影者のいつ方向に目星をつけて、見る。そこには誠をスマホカメラで撮影している若いライブ配信者の男が立っている。

ゆっくりと男に向かって歩き出す誠。歩調は徐々に早くなって最後には走る。

○渋谷・ハチ公前周辺（雨）

誠に気付いて逃げ出す若いライブ配信者の男。雨に濡れた歩道で滑って彼が倒れると、誠はその頭を蹴りつけ、我を失って繰り返し殴りつける。

○渋谷・ハチ公前（雨）

その様子を遠巻きに眺めていた絵馬はおもむろにスマホカメラを誠に向けると、タブを切り替えて動画配信アプリのライブ配信画面を呼び出す。

先ほどの会話は全てライブ配信されていたのだ。

絵馬「うわー、こえー」

ライブ配信画面に茶化し半分で絵馬を非難するコメントが流れる。

絵馬「（視聴者に向けて）でもさー、誰かが教えてやらないとあのおじさん可哀想じゃん。これだって正義さ。正義なんて見方次第でどうしても変わるからね」

○渋谷・ハチ公前周辺（雨）

突然の凶行に辺りは騒然。しかし誰も止めようとはせず、ただ遠くから眺めるばかり。

ライブ配信者の男「ごめんなさい……

ごめんなさい……ごめんなさい……」

泣き喚く血まみれのライブ配信者の男の口に、誠はバラの花を無理矢理ねじ込み、踏みつける。

誠「謝るな。謝るならやるんじゃない。

いいか、なあ。謝るなら最初からやるな！」

と、通報を受けた警察官が駆け寄ってきて、誠を取り押さえる。

警察官1「落ち着いて、落ち着いて」

警察官2「はいどうしましたかー」

誠「放せよ！俺を捕まえてる暇があるならさっさと犯人捕まえろよ！あの子を返してくれよ！まだ11歳だぞ！11歳の女の子が……11歳の……」

言いながら涙ぐんで、誠は泣き崩れる。

○テレビ画面・ニュース

誠と妻の久我真理菜（41）の会見

模様抜粋がテロップ付きで流れている。

キャスターの声「2015年に起きた久我恵ちゃん失踪事件から本日で2年が経ち、恵ちゃんのご両親が改めて情報提供を呼びかける会見を開きました」

憔悴した表情の誠が必死に報道陣に訴えかけている。

誠 「将来は立派なダンサーになるはずの普通の女の子でした」

ジャンプカット。

誠 「せめて生きているかどうか、それだけでも知りたい」

ジャンプカット。報道陣に頭を下げる誠と真理菜。

誠 「どうかお願いします」

画面は切り替わってトランプ大統領の写真に。

キヤスターの声 「今日で就任から三ヶ月。

アメリカのドナルド・トランプ大統領の成績は？」

○オフィスの小会議室

人事部長の女性がテーブルに書類を広げて内容を確認している横で営業部長の男性がタブレットで動画を見ている。それは誠がユーチューバーを襲撃する様子をスマホで撮ったもの。

二人の前には誠が心ここにあらずの
状態で座っている。

人事部長「久我さん。単刀直入に言いますね。
懲戒解雇処分が決定しました。理由は分か
りますよね？」

誠「……」

営業部長「我々もできるだけ力になりたかつ
たけど、まあ今はさ、久我さんちよつと
休んだ方がいいよ。その方がいい。ね」

人事部長「（書類差し出して）こちら通達
ですので内容をご確認下さい」

間。

誠「いやー、助かりますよ。どうもありがと
うございます。これで搜索にもっと時間が
割ける。もっと早く辞めてればよかったです
すねー」

怪訝な表情で誠を見る人事部長と営業
部長。笑顔を浮かべる誠。

○久我家・居間（夜）

暗い室内をテレビ画面の光がうつすらと照らしている。玄関が開く音。

誠の声「ただいまー」

誠が居間に入ってきて電気をつける。テーブルの上にビールの空き缶が何本も転がっているのが誠の目に入る。ソファーに目をやる誠。そこには真理亜がだらしなく寝転がっている。誠、無言でゴミ袋を取り出すと、空き缶を片付け始める。

○屋内駐車場の詰め所

誠の駐車場バイト面接中。

年配の男性社員が眼鏡をズラして食い入るように誠の履歴書を読んでいる。

年配の男性社員「うん、採用」

彼は一人大きな声で笑うと、

年配の男性社員「ウチは経歴とか関係ないから」

○屋内駐車場の入口

冷たい風の吹きすさぶ中、駐車場警備員の格好の誠は入口にじっと立って通りを眺めている。
季節は12月。厚手の服を着た人々が誠には目もくれず寒そうに通り過ぎていく。

○住宅街（夜）

電柱に恵の写真の載った「探しています」のビラを貼っていく誠。
作業をしながら冷たい手にフーと息を吹きかける。

○久我家・居間（夜）

帰宅した誠がビールの空き缶を片付けている。
ふと、つけっぱなしのテレビを見ると、映っているのは麻原彰晃の死刑執行ニュース。

今は2018年7月。

○渋谷・スクランブル交差点前

炎天下で「探しています」チラシを配っている誠。

しかし誰も受け取ろうとしない。

○屋内駐車場の入口

出庫しようとする車にストップをかけた通行人を渡らせる誠。

頬はこけ、動きには力がこもらない。

○住宅街（夜）

電柱に「探しています」チラシを貼って行く誠。

と、新しくチラシを貼ろうとした電柱に以前貼ったチラシがまだ残っていることに気付く。

チラシは幾度も雨にさらされたせいでヨレヨレになって剥がれかけている。

○公園（夜）

一人でブランコに座って揺られている
誠。

* * *

（フラッシュ）

陽光を浴びて笑顔で隣のブランコに
揺られる久我恵（11）。

* * *

隣のブランコを見る誠。そこには誰も
座っていない。

○久我家・居間（夜）

いつもと同じように空き缶を回収して
いる誠。すると、床にくしゃくしゃに
丸めた紙が落ちていることに気付く。
拾って広げると、あの「探しています」
のビラ。しかし絵には下品な落書き
がされ、「えーん、死んじゃったよー、
痛いよー、パパ助けてよー」などの

心ない文字が躍っている。

怒りに震える誠。ソファで酔い潰れて、
寝ている真理菜の肩を揺さぶって、

誠「おい……おい！」

真理菜はまだ酔いが残っていて
ろれつが回らない。

真理菜「んく……なにい？」

誠、チラシを真理菜に見せて、

誠「これ、どこで見つけた。誰がやったんだ
こんなこと」

自虐的に笑う真理菜。

誠「笑い事じゃないだろ！」

真理菜「なんにも知らないんだねえ」

誠「なにが！」

真理菜、部屋の片隅に置かれた
キャビネットの一番下の引き出し
を指差す。

誠、困惑の表情を浮かべたまま
キャビネットに近づく。

少し躊躇ったのち引き出しを開けると、

そこには先ほどのものと同じような
落書きビラがゴミ袋にみっちり詰
め込まれている。

真理菜「そんなのずっと前からなんだよ。

あんたが知らないだけ。知ろうとしなかつ
ただけ。誰も興味なんかない」

再び眠る真理菜。放心状態の誠。

力なくテーブルまで歩いて行って、
座ると、テーブルに置かれた空き缶を
ひとつ手に取る。振ると、まだ中身が
少し残っている。誠はそれを飲み干す。

○住宅街

以前ビラを貼るために通った道を、
缶ビールの詰まったレジ袋を手に、
ビールを飲みながら通り過ぎる誠。

○久我家・居間

酔った誠がテレビに向かって話しながら
らビールを飲んでいる。

誠 「なにやってんだよお前。給料もらってんだろ。給料もらってんならお前、給料分の働きはしなきゃダメだろう……」

缶ビールを飲み干す。空き缶の山にまだ中身の残っている缶を探すが、ない。

誠 「おい！ ビールねえじゃねえかよ！
おい！！！」

○屋内駐車場の入口

酔った誠が通行人に通るよう手を振っている。しかしそれは誘導ミス。

出庫しようとした車が通行人に接触してしまふ。

もう一人の駐車場警備員が足に軽い怪我をして歩道に座り込んだ通行人に駆け寄る。

駐車場警備員 「だ、大丈夫ですか！」

詰め所から年配の男性社員がやってきて誠に詰め寄る。

年配の男性社員「お前……なんてことしてく
れたんだ！」

しかし誠は酔ってヘラヘラしている。

誠「（通行人に）すみませんねー。酔っ払っ
てるから。酔っ払っちゃった」

絶句する年配の男性社員。

○公園（夜）

ブランコに揺られながら缶ビールを

飲む誠。

誠「メグミー！ お父さんお仕事クビになっ

たぞー！ なー。聞いているかー。お父さん

クビだー。バカな奴がいるんだー世の中は。

（怒声）メグミー！」

と、隣のブランコを見て、

* * *

（フラッシュ）

陽光を浴びて笑顔で隣のブランコに

揺られる久我恵。誠に笑いかける。

* * *

誠は幻覚の恵を見て笑い出して、その場で立ち小便する。

○久我家・居間（夜）

壁にぶつかったり物を落したりしながら、誠が騒々しく帰ってくる。

誠「ただいまー。真理菜ー。おーい、帰ったぞー。どこだー。んー？ いないのかー」

鼻歌を歌いながら服を脱ぎ始める誠。
脱ぎながら浴室へ向かう。

○同・浴室（夜）

泥酔した誠がお湯を張った浴槽に倒れるように入る。

鼻歌を歌いながら、持ち込んだ缶ビールを開けると、一口飲んで缶を床に置く。

湯に浸かりながら目をつむって鼻歌を歌い続ける誠。その歌声は次第に弱くなって、やがて誠は眠ってしまう。

眠ったまま誠の頭は湯に沈んでいく
倒れた缶ビールからビールの残りが流
れ出て、まるで血の跡のように排水溝
へと続いている。

○ T .. 2015 - 2017 久我真理菜

○ 久我家・浴室

服を着たまま風呂イスに座り、漠然と
空の浴槽を眺めている真理菜。ポタポ
タと蛇口から水滴が滴る音が響く。
と、ドアの向こうから男の声。

若手刑事の声「あの」

驚いて小さな叫び声を上げる真理菜。

若手刑事の声「あ、すいません。真理菜さん、
あの、ちよっとお伺いしたいことがあるん
ですが、リビングまでお願いできますか」

真理菜「ええ、今行きます」

○ 同・廊下

真理菜が浴室から出てくる。静寂に包まれていた浴室から一転、辺りは騒がしく、何人かの刑事が何か話したり、家を出たり入ったりしている。

○同・居間

真理菜が部屋に入ってくると刑事の

野田（58）と誠がテーブルで

真理菜を待っている。

軽く頭を下げる野田。真理菜を見もせず頭を抱えている誠。良い知らせではないことが分かって、真理菜はしばらくその場に棒立ちになる。

ソファーに座った女性刑事がノート

パソコンに何か打ち込んでいる。

野田「（彼女に）田島、悪いけどちょっと、根津ちゃん捕まえて外のマスコミ捌いてきてくれる？ 近所迷惑だよ」

女性刑事「あ、はい。（真理菜に）失礼します」

女性刑事は家の外に出ていく。

野田「（真理菜に）まあ、どうぞ」

真理菜、誠の横に座る。

野田「もうあの、旦那さんにはお話したんですが、お預かりしました脅迫状というか……んー、例の、血の付いたアレ」

タブレットを指で繰って画像を探す

野田。血の付着した女子もののパンツの画像を真理菜に見せる。

野田「アレなんですけれども、担当部署の方から回答がありました、えー……」

誠「あの子の血だ。どっかのクソツタレが送りつけてきたあの子のパンツに付いてたのはあの子の血なんだよ！」

真理菜「怒鳴らないでよ。なんで怒鳴るの」

野田「まああの！ まああの、奥さん、何も死亡が確認されたわけではないですし……」

真理菜「なんで私に言うんですか。怒鳴ってきたのこの人ですよ」

誠「お前あの子が心配じゃないのか」

野田が咳払い。

野田「こう言った事件は長期戦になることもありますから、ご両親がいちばん冷静でない」と

途方に暮れる誠と真理菜。

野田「電話、メール、んー、チャット。

まあそういったもので犯人から身代金の要求ですとか、何かしら連絡があればですね、我々の方も動きやすいんですけれども。今はあの、場所が特定できますからね。

ただ下着一枚ですと手がかりと言うには心許ない。ま、犯人の側からアクションはあったわけですから。そうだなー、次のアクションをね、んー、待って。んー……」

真理菜「血だけですか。付着していたのは血だけなんですか」

沈黙。

野田「精液も検出された、と聞きました」

テーブルを叩きつける誠。

(F・O)

○ネイルサロン

客の手にネイルアートを施している

真理菜。

真理菜「お子さん何年生なんですか？」

客「今年で5年生ですねー」

真理菜「じゃあそろそろ難しくなってくる

感じの」

客「どうなんですかねー（笑）。真理菜さん

はお子さん、いるんですか？」

隣で作業をしていた同僚の松永（43）

がチラと真理菜を見る。

真理菜「いましたよー」

客「あ、ごめんなさい。なんか変なこと聞いて

ちゃった？」

真理菜「ううん、気にしないで下さい」

○同・休憩室（夜）

勤務を終えた真理菜が自分のロッカー

の前でスマホを見ている。

松永が入ってくる。

松永「お疲れ様」

真理菜「お疲れ様です」

松永「ねえ久我さんさ、大丈夫？」

真理菜「ん？何がですか？」

松永「いや……もう少し休まなくて大丈夫かなあって」

真理菜「あー、でも家に居てもしょうがないですから」

松永「でもって……でも、でいいの？余計なお世話かもしれないけど」

真理菜「……」

松永、換気扇を点けて給湯スペースでタバコを吸い始める。

松永「私も前の夫が死んだ時はちよつと今の久我さんみたいだったよ。バカな死に方をしたのよ。酒飲みでね、飲んでまま湯船につかって、そのまま。ある意味幸せな死に方かもしれないけど、残されたこっちはさ」

真理菜「すいません、急ぐので失礼します」

部屋を出て行く真理菜。

○ダンス教室（夜）

課題曲に合わせて小学生高学年クラスが練習中。真理菜は壁際でボーッと

その光景を眺めている。

講師「はい、じゃあ十分休憩」

生徒たちがその場に座って話したり

水分を補給したりする。

生徒の一人の中原絵馬（11）が真理

菜のもとにやってくる。

絵馬「こんばんは」

真理菜「おー、絵馬ちゃん。こんばんは」

絵馬「まだ、恵ちゃん帰ってこないんですか」

真理菜「今はね。大丈夫だよ、きっと。心配

してくれてありがとう」

真理菜、絵馬の爪に天使の羽の描かれ

た付け爪が貼ってあることに気付く。

真理菜「それ……どうしたの？」

絵馬「それ？」

真理菜「その、ネイル……」

絵馬「恵ちゃんに貰ったんです」

真理菜「そう……危なくないの？ レッスン

中に怪我したりとか、しない？」

絵馬「先生には外せって言われてるんです

けど、でも、恵ちゃんがくれたものだから」

○久我家・居間（夜）

真理菜が帰ってくると、テーブルの上

にはビールの空き缶の山、テレビをつ

けたままソファで眠っている誠。

テレビでは中国人観光客の爆買いの

ニュースをやっている。

ゴミ袋を取り出して空き缶を中に入れ

ていく真理菜。

誠「おい帰ったのかー」

誠は泥酔している。

誠「おおい！」

真理菜「帰った」

誠、胡乱な眼差しで真理菜を見る。

誠「なんだお前か」

手を止める真理菜。

真理菜 「私が帰っちゃいけないの？」

誠 「突っかかるなよいちいち」

軽蔑するように鼻を鳴らして、真理菜は片付けを続ける。

誠 「誰のせいでこんなことになったと思ってるんだよ。反省の色がない」

真理菜 「私が悪いって言うの！？」

誠 「じゃあ誰が悪いんだよ！ 言ってみろ

よ！ 俺か！？ 俺が悪いのか！？」

誠はソファから起き上がってゆっくりと真理菜に近づいてくる。

間近でにらみ合う二人。

真理菜が空き缶を持った手を上げようとすると、誠はその手首を掴んで強く握りしめる。

真理菜の手が震えて、その手から空き缶が落ちる。

誠、手を放して風呂に向かう。

誠 「風呂沸いてるのか？」

呆然として椅子に座り込む真理菜。

○同・寝室（夜）

ベッドに横になったパジャマ姿の真理菜がアザになった手首を眺めている。

その腕の向こうに恵が現われる。

恵「ねえお母さん、ネイルしてよ。天使のやつ」

真理菜「学校でなんか言われるんじゃない？」

恵「大丈夫だから。お願い」

真理菜「仕方がないなあ。お父さんには内緒だよ」

* * *

ネイル道具を出して下準備をする

真理菜。恵の手をお湯につけてふやかし、爪をヤスリで整え、甘皮を処理し
…そこで真理菜は手を止める。

真理菜「あ、ネイルチップでよかったか。

付け爪じゃすぐ外せないもんね」

恵「いいよ、付け爪で」

真理菜 「いいの？ 知らないよ」

施術を続ける真理菜。

しばらくして天使の羽の柄の付け爪が
貼り終わる。

真理菜 「はい、できた」

無表情に付け爪を眺める恵。

真理菜 「ありがとうは？」

恵 「友達に見せてくる」

走って部屋を出て行く恵。

真理菜 「恵！ ちよつとどこ行くの！」

恵を追って部屋を出て行く真理菜。

○同・居間（夜）

真理菜が居間に入ってくると、ビール
缶を片手に持った誠が恵を詰問してい
るのが目に入る。

誠 「どうしたこの爪。お母さんがやったの
か？ 剥がしなさい。ダメだろう、お父さ
んと約束したろ？」

誠、真理菜に気付く。

誠 「取るのは後でいい。お父さん、お母さんと話があるから部屋に戻ってなさい」

無言で部屋に戻っていく恵。

ビールを一口飲んで真理菜を手招きする誠。

おそろおそろ近づいていく真理菜。

誠はテレビを見ながら話し出す。

誠 「何か言うことはないの」

真理菜 「でもあの子が――」

誠 「でもじゃない何か言うことはないかと言ってる」

真理菜 「ごめんなさい」

誠 「謝るな。謝るならやるんじゃない！」

ビール缶を床に叩きつける誠。

誠 「ダンスのレッスンで怪我でもしたらどうする。母親の自覚はないのか？ 付け爪なんて。男を誘惑でもするつもりかよ？」

真理菜 「ちよっと待ってよそれどういう意味なわけ……？」

誠 「それぐらい自分で考えたらいい」

別のビール缶を開ける誠。

怒りに震える真理菜。

叫び出す。

○同・寝室（夜）

叫びながら起き上がる真理菜。今まで見ていたのは夢。

苦痛に顔を歪めて腕を見ると、アザを隠すためのリストバンドが二箇所に巻かれている。

そこから顔を上げると、無精ひげを生やした誠がベッドに腰掛けて、じつと真理菜を見つめている。

小さく叫んで防御の姿勢を取る真理菜。

誠「そんなに怖がるなよ」

誠、笑顔を浮かべて、両手を広げる。

真理菜はそれを見ても動かない。

誠、真理菜に抱きつく。

誠「ごめんな。もう辞めたから。酒飲むのやめたんだよ。俺バカだよな。あの子のい

ないクリスマスがこんなに寂しいとは思わ
なかつたよ」

泣き出す誠。表情一つ変えずにその頭
を子供のように撫でる恵。

窓の外には雪がチラついている。

○同・居間（夜・日替わり）

誠と真理菜が食事をしている。

テレビに流れているのは2016年の
バラエティ番組。

誠、テレビを見つつ食事をしながら
イライラとテーブルを指で叩き続けて
いる。

誠、突然席を立って台所に行き、何か
を探す。

誠「あれ、真理菜、コーヒーは？」

真理菜「ない？」

誠「ないよ。どこ探してもない」

真理菜「ごめん、切らしてたかも」

誠「ごめんって……」

真理菜「買ってこようか？」

誠「いいよ別に……」

誠、席に戻ってタバコを吸い始める。

真理菜「そこで吸わないって決めたじゃん」

誠「いいだろそれぐらい。じゃあ真理菜は」

あの子のために何かやってるの？」

真理菜「は？」

誠「俺が自分のためにこんなことしてると

思ってる？ 自分のことしか考えてないん

だな。お前がそんなだから誘拐されたんじ

やないのか。年端もいかない自分の娘にあ

んなキヤバ嬢みたいなネイル付けて。どっ

かの変態を刺激した可能性だってあるだろ」

荒っぽく箸をテーブルに置く真理菜。

溜め息をつく誠。

誠「コーヒー買ってくる」

誠、外へ出て行こうとして、振り返る。

誠「俺はあの子のためにやってるよ。真理菜

は何もしないつもりなの？」

○ネイルサロン

施術中の真理菜。疲労が溜まっていて、ネイルの下準備で客の甘皮を押し上げる際に思わずニツパーを客の爪の根元に突き刺してしまう。

客「痛い！」

慌てて松永がやってくる。

松永「ちょ、ちょ、大丈夫？ お客様、お怪我はありませんか？」

○同・休憩室（夜）

帰宅の準備をする真理菜に松永が説教している。

松永「何か大変なことがあるならさ、話してくれればいいじゃない。言ってくれないとこっちだって迷惑よ。また同じようなことしたらどうするの？」

真理菜「……失礼します」

○渋谷・スクランブル交差点前（夜）

「探しています」のビラを配る真理菜。
しかし通行人は相手にしない。

○住宅街（夜）

電柱に「探しています」のビラを貼って
いく真理菜。

一つの電柱に脱走インコの「探して
います」ビラが貼ってある。

真理菜はそれを剥がして捨てると、
自分のビラに張り替える。

○街路（夜）

歩きスマホで情報収集用のSNSアカ
ウントをチェックしている真理菜。

来ているのはイタズラ情報ばかり。
向こうからやってきた男とぶつかって、
真理菜は倒れる。

男「邪魔なんだよババア」

男は去って行く。

○久我家・居間（夜）

疲れ切った真理菜がソファに倒れ込む。点けっぱなしのテレビでは夜のニュースで2017年のアメリカ大統領選の特番がやっている。

と、真理菜のスマホがバイブする。

真理菜は目をつむってしばらく無視しているが、やがてスマホを手に取り、画面を見ると、LINEに〈恵〉からメッセージが来ている。

固まる真理菜。メッセージは次の通り。
「娘は生きている。警察や夫に知らせたら娘は死ぬ。お前だけがこれを読め」
真理菜は返信する。

「誰？」

〈恵〉のアカウントから無題のボイスメッセージの返信。再生する真理菜。

恵の声 「……お母さん？」

真理菜 「恵……！」

〈恵〉の返信。

「2000万。夫の死亡保険で充分
賄えるはずだ。時間はかかってもいい。
だが支払えなければ娘は帰らない」
しばらくその画面を眺めている真理菜。
と、誠が帰ってくる。

誠「ただいま」

真理菜「おかえり」

誠「だらしがないな。なにやってんの」

真理菜「なんでもない。先、お風呂入れば」

誠「ええ？」

真理菜「ちよっと、買い物行ってくる」

誠「うん、じゃ先入ってるわ」

○コンビニの外（夜）

レジ袋を持って店から出てくる真理菜。
そこで立ち止まって、袋から缶ビール
を取り出す。

しばし眺めて、真理菜はビールを飲む。

○住宅街（夜）

缶ビールを飲みながら歩く真理菜。

電柱の前で足を止めて、自分で貼った

「探しています」の、誰かに落書きの

描かれたビラを見る。

*

*

*

(フラッシュ)

夫の死を語る松永。

松永「バカな死に方をしたのよ。酒飲みでね、
飲んでまま湯船につかって、そのまま」

*

*

*

真理菜「酒……湯船……」

真理菜、決意を固めてビラを破る。

○ 2019 - 2015 久我恵

○ 山道

乗用車がやってくる。

停まって、運転していた真理菜が

ポストンバッグを手に外に出てくる。

森の中に何かを探すと、赤いフードを

被った人物が森の中に立っているのを
発見する。フードの下の顔は見えない。
LINEが着信。真理菜がスマホを
見ると、〈恵〉からメッセージ。
「カネを足元に置いて目をつむれ。
確認が済んだら次の連絡をする」
目をつむる真理菜。何者かの足音が
近づいてきて、次いでバッグを開け、
中の金を確認する音。
バッグが閉じる音と、それから足音が
去って行く音。スマホの着信音。
真理菜は目を開けて、バッグが無くな
っていることを確認すると、スマホを
見る。〈恵〉から「ついてこい」の
メッセージ。
赤いフードの人物が森の奥に消えてい
く。真理菜、追う。

○森の中

しばらく歩くと真理菜は赤いフード付きレインコートの人物を見失ってしまふ。

真理菜「どこ？　ねえ！」

やがて、森が開けて、湖に出る。

○湖畔

そこにはボロボロの服を着た短髪の少女が立っている。

振り返ると、久我恵（15）。

恵「お母さん……？」

真理菜「恵？　恵なの……」

黙って頷く恵。

真理菜、恵に駆け寄って抱きしめる。

真理菜「よかった……無事だったんだね」

恵「ちよつと、痛いよ」

真理菜「（放して）ごめん。大丈夫？　どこ

か痛いところはある？　変なこととか……

された？」

恵「ううん、大丈夫。平気だよ」

真理菜「ごめんね、こんなに遅くなって」

恵「気にしないでよ。お母さんは何も悪くないよ。私を助けに来てくれた」

真理菜「おうちに帰ろう。恵の好きな物作ってあげる」

真理菜、恵と一緒に森に戻っていく。

恵「ねえお母さん」

真理菜「なに？」

恵「身代金って、どうやって用意したの？」

真理菜「……いいのよ、恵は知らないで」

恵「お父さんは来てないの？」

真理菜「お父さんは来ない」

恵「どうして？」

真理菜「後でゆっくり話すけど、お父さんね。亡くなったの」

恵「お母さんが殺したから？」

足を止める真理菜。

恵「保険金で身代金を作るため？ それとも、前から殺したかったからちようど良い機会だと思った？ どうやって殺したの？」

真理菜「そんなことない。違う。あなたの
ために私は」

恵「ねえお母さんてさ、昔からそうやって
私に負い目を作ろうとしてたよね」

真理菜「そんなことない」

恵「そうかな。私の記憶は違うよ」

○（回想）久我家・子供部屋（夜）

スマホでアニメを見ている恵（11）。

居間からは誠と真理菜が喧嘩する音が
聞こえてくる。

口論をかき消すように、スマホの音量
を上げる。

○（回想）同・廊下（夜）

廊下に出てくる恵。居間からは誠の
イビキが聞こえてくる。

静かに風呂に向かう恵。

真理菜の声「まだお風呂沸いてない」

恵、驚いて振り返ると、表情に怒気

を含んだ真理菜はいる。

真理菜「なんでお母さんを困らせるようなことをするの？ お父さんの子供だね。お風呂掃除だって楽じゃないんだよ。もう困らせないでよ」

恵「私……」

真理菜「外で浴びてくれば？ 公園の水道なら掃除しなくても使い放題だよ」

○（回想）学校・教室

休み時間。

教室の片隅で孤立している恵をクラスメートが噂している。

クラスメートたち「あいついつも臭くない？ 風呂入ってないんじゃないの？」

○（回想）公園（夜）

水道水で髪や腕を洗っている恵。
吐く息が白い。

○（回想）久我家・玄関外（夜）

ドアを叩いている恵。

恵「ねえお母さん。開けてよ。お願い。ねえお母さん」

急にドアが開いて、真理菜が恵の髪を引っ張るように中に入れる。

真理菜の腕にはアザがいくつもできている。

真理菜「せっかく眠ったのにお父さん起きちゃうじゃん。どうするの。叩かれるよ。すっごい痛いよ。つていうかあんた今まで何してたの？ こんな時間まで好き勝手にほつつき歩くんだったらもう帰ってこないでいいよ。ご飯ないからね。腐るから捨てちゃった」

○（回想）同・居間（夜）

卓上には平皿に盛られた生ゴミが。

恵は椅子に座ってそれを眺めている。

恵、シンクに走って行って、嘔吐する。

ソファーには誠が眠っていて、その
無神経なイビキが聞こえる。

○（回想）同・子供部屋（夜）

ベッドに横になって無表情に天井を
見上げている恵。

そこに、真理菜が化粧箱を持ってやっ
てくる。

恵「どうしたの……」

真理菜「手出して。いいから」

手を差し出す恵。真理菜はその爪に
ネイルの下準備を施していく。

恵「ネイルなんかしたくない」

真理菜「いいじゃない。みんなの人気者に
なれるよ」

恵「なりたくない」

真理菜「ならなきゃいけないの。お父さんは

恵に人気者になって欲しいの。人気者の
有名なダンサーになって欲しいんだよ」

恵「でも」

真理菜、恵に平手打ちする。

真理菜「痛い？　じゃお母さんと同じだね」

真理菜、恵の爪に天使の羽の柄の付け爪を付ける。

○（回想）ダンス教室（夜）

練習中、恵が足を引っかけて転倒する。

講師「大丈夫？　中原さん、見てあげて」

手の爪を見る恵。付け爪ごと生爪が剥がれてしまっている。

絵馬がやってくる。

絵馬「わ、生爪行った？」

苦痛の表情で爪を見つめる恵。

絵馬「でも、そのネイル、綺麗だね」

恵、絵馬を見る。

○森の中

真理菜を見つめる15歳の恵。

真理菜「でも、それは」

恵「大丈夫だよ。恨んでなんかいないし、

お母さんには何も期待してないから。意外だったな。よくやったじゃん。殺せるなんて思わなかった。偉い偉い」

恵、笑みを浮かべて真理菜の頭を撫でる。それから耳元で囁く。

恵「今は誘拐してくれてありがとうって思ってる。あの男のおモチャにされても、お母さんとお父さんと暮らすよりはマシだった」

呆然とする真理菜。

恵は笑みを浮かべたまま森の中に一人消えていく。

真理菜「待って。恵」

真理菜、背後から何者かに鈍器で殴られて倒れる。走り去っていく赤いフードの人物が見える。

と、顔の横に地面に落ちた天使の羽の柄の付け爪を発見する。

* * *

(フラッシュ)

ダンス教室で真理菜に天使の羽のネイ

ルを見せる絵馬。

喫茶店で同じネイルをしていた恵。

雨のハチ公前、赤い傘を差して誠と

話していた少女。

* * *

真理菜、ハツとして、倒れたままスマホを取り出す。

○中原家・外

警察の捜査が入っている。

報道陣が詰めかけて、被疑者の中原

晴彦（45）が出てくるのを今か今かと待ち構えている。

○同・庭

ドラム缶に何かを燃やした残骸が残っており、捜査員が調べている。

○同・和室

寝たきりの中原祖父（80）がうめい

ている。

捜査員「ちよっと誰かさ、病院手配できる？」

○同・物置

刑事の野田が室内の異様な様子に顔をしかめている。

そこは刑務所の独房のような殺風景な部屋で、監禁用と見られる二人分の鎖が取り付けられ、二人分のポータブルトイレが置かれている。

警官の制止を振り切って晴彦がやってくる。

晴彦「違う！ 私は何もやってないんです

よ！ あの子どもたちが……」

野田「子供たちはどこにいるの？」

晴彦「知らない。知らないんですよ。なんでこんなことになったのか……」

警官が再び晴彦を取り押さえて、晴彦は外へと連れ出される。

野田、それを眺めて、

野田「んー、なんだかなあ」

○2015 | 中原絵馬・久我恵

○住宅街（夜）

ダンス教室の帰り、恵（11）と絵馬

（11）が一緒にいている。

絵馬「ねえ、あんなの楽しい？」

恵「なに、あんなのって？」

絵馬「ダンスに決まってるじゃん」

恵「どうかな。普通」

絵馬「じゃあ、好きじゃないんだ」

恵「ウチは親が通わせたがってるから。中原

さんは楽しそうだね」

絵馬「楽しいさ。親から離れられる貴重な

時間だから」

電柱に貼られたインコの「探していま

す」ビラを指差す絵馬。

絵馬「これ、ウチの親が貼ったんだ」

恵「インコ、飼ってたの？」

絵馬「うん。だけど、逃がした」

恵「なんで？」

絵馬はふふと笑う。

絵馬「ねえ、ウチ寄ってきなよ」

○中原家・絵馬の部屋（夜）

小綺麗だがどこか殺風景で魂の抜けた
ような部屋。

そこに置かれた鏡台と化粧品だけは
禍々しいほどの輝きを放っている。

恵、羨望の眼差しでそれを見る。

恵「うわあ。よくこんなに集めたね」

絵馬「すごいでしょ」

恵「うん、すごい」

恵、絵馬に笑いかける。

絵馬「お化粧してあげようか？」

恵「え、いいの？」

だが、一瞬輝いた恵の表情はすぐ曇る。

恵「あ、でもやっぱりいいや。ウチ、親が
そういうの嫌いから」

絵馬「じゃあ、泊まっていけば？」

恵「え」

絵馬「いいじゃん。泊まり。楽しくない？」

恵「ええと……」

恵が答えに窮している間に、絵馬は

化粧の準備を始める。

○同・階段下（夜）

エプロンをした中原晴彦が絵馬の部屋のある二階を眺めている。部屋はキヤツキヤとうるさい。

○同・絵馬の部屋（夜）

年齢に不相応な大人っぽいメイクをしてコスプレのような服で着飾った恵が鏡越しに自分の姿を見ている。

絵馬が鏡に入ってきて、

絵馬「すつごく可愛いよ」

恵「恥ずかしいよ」

晴彦の声「ごはんできたよー」

○同・居間（夜）

食事をしている恵と絵馬、晴彦の三人。

晴彦はどこか落ち着かず、恵と目を合
わせようとしない。

晴彦「め、恵ちゃんは……お父さんとお母さ
んは何をしている人なの？」

恵「あ、はい、父は商社の営業で、母は
ネイリストをやってます」

絵馬「えー、ネイリストなんだ。そのネイル
もお母さんにやってもらったの？」

恵「……うん。あ、絵馬ちゃんのお母さん
は？」

沈黙。

晴彦「母親はいないんです。いや、変な話
じゃなくて、なんていうか、まあ、合わな
かったっていうか……」

ぎこちない笑みを浮かべる晴彦。
和室から苦しそうなうめき声。

晴彦「はいはい、今いくよー」

晴彦、和室に入っていく。

そこには寝たきりで認知症の祖父がおり、晴彦が床ずれを直すのが恵の目に入る。

○同・居間（夜・時間経過）

晴彦が食器を洗っていると恵がやってくる。

恵「手伝います」

晴彦「え、いや、いいよ。そんな」

恵「絵馬ちゃんがお風呂出るまで暇なので。

何したらいいですか……イテ」

皿洗いを手伝おうとして、恵、生爪の剥がれた指を押さえる。

晴彦「……怪我してるの？」

晴彦、恵の手を取って傷をまじまじと見つめる。

晴彦の鼓動と呼吸が荒くなってくる。と、パジャマ姿の絵馬が髪を拭きながら部屋に入ってくる。

絵馬「おまたせー。どーぞ」

恵「あ、うん。じゃあ、すみません。お風呂
頂きます」

部屋を出て行く恵。その後ろ姿を目で
追いかける晴彦。

○同・絵馬の部屋（夜）

恵と絵馬が眠っている。だが恵は眠れ
ない。スマホがバイブして、恵がそれ
を見ると、真理菜からのLINE。

「今どこにいるの？ 何やってるの？
何時だと思ってるの？」

恵はうんざりした表情でスマホの電源
を落す。

それから、トイレに立つ。

○同・廊下（夜）

音を立てないように廊下を横切って
トイレに入る恵。

晴彦の影が画面に入ってくる。

○同・トイレ（夜）

恵が便器に座っていると、突然電気が消える。

恵「えっ」

晴彦の声「あ、ごめん。入ってた？ す、すぐ点けるから。ごめんね」

だが電気は点かない。

恵の表情に怯えが走る。

静寂。

そして、ドアをこじ開けて晴彦が入ってくる。

叫ぼうとする恵の口を押さえて、

晴彦「大丈夫……大丈夫……大丈夫だから」

○同・絵馬の部屋（夜）

絵馬が目を開けると、暗闇の中に恵が立っている。

無言で見つめ合う二人。

絵馬「もう済んだの？ 早かったね」

恵「わかってたの？ それで家に呼んだの？
あんな格好させたのも？」

絵馬「怒ってる？」

恵「……わからない」

絵馬「お母さん、気付いて出ていったんだ。

あいつがなんで私に化粧をさせるのか。

あんまり覚えてないけどね。小さい頃は

写真を撮るだけで済んでたし。最近は何も

しなくなっただけ。悪いことだって意識は

あるみたい」

恵「じゃあなんでさ」

絵馬「……なんでだろう。わかってもらいた
かったのかな。同じ痛みを」

恵、絵馬のベッドに入ると、手を握る。

そして、絵馬の指の生爪をはがす。

絵馬「ウツ！」

恵「同じ痛み。痛い？」

絵馬「いったあ」

笑う恵。

恵「最低だね」

絵馬「うん、最低」

恵「警察呼ぶ？ あいつ刑務所入れちゃおうか。証拠もあるし」

血の付いたパンツをひらひらと弄ぶ

恵。

絵馬「そして私は施設送り」

恵「そして私はまたあの地獄に戻る」

絵馬「親父、死んだら保険金入るんだって。

そしたらどっか遠く行く。ずっと遠く」

絵馬、笑い出す。

恵「ねえ、誘拐してよ」

○同・居間（日替わり）

恵が誘拐された事件の報道をテレビで

見ながら頭を抱えている晴彦。

恵と絵馬は素知らぬ顔で食事している。

晴彦「け、警察に電話しよう。絵馬。警察に

電話……」

絵馬、スマホを見ながら、

絵馬「児童誘拐と強制性交等罪。どれぐらい

の罪になるんだろ」

恵「大丈夫ですよ。バレなきゃ罪にならない
ですから」

晴彦「お前たちどうかしてるぞ……」

恵・絵馬「おまいう」

和室から祖父のうめき声。

晴彦「うるさい！ 静かにしててくれって！」

うめき声は止まらない。

晴彦「ああもう！」

泣きながら和室に向かう晴彦。

恵と絵馬、顔を見合せて笑う。

○同・絵馬の部屋（日替わり）

腕立て伏せをしている恵。

そこに学校から帰ってきた絵馬が入っ
てくる。

絵馬「わ、なんだなんだ」

恵「ずっと家の中じゃ体なまっちゃうからね」

絵馬「なんかかっけー」

○同・絵馬の部屋（日替わり）

外は雪。

絵馬が恵に勉強を教えている。

○同・風呂場（日替わり）

恵と絵馬がキャツキャとはしやぎながらお互いに髪を切っている。

○渋谷・ハチ公前（雨）

赤い傘を差した絵馬がずぶ濡れの誠に近づいていって、冒頭の台詞を話す。

○中原家・絵馬の部屋（雨）

パソコンでそのライブ配信を見て笑う恵。

○同・居間（夜・日替わり）

恵（15）と絵馬（15）がテレビのニュースを見ながら食事をしている。流れているのはトランプ大統領の話題。

死んだように食事をしていた晴彦は
突然席を立つと、台所に向かって、
包丁を取り出す。

恵と絵馬を見つめる晴彦。晴彦を見つ
める恵と絵馬。

晴彦、手首を切って倒れる。

その顔を覗き込む恵と絵馬。

恵「それぐらいじゃ死なないよ」

絵馬「つていうか、死なせないし」

意識を失う晴彦。

○同・寝室

晴彦、目を覚ますと独房に改造された

寝室で鎖に繋がれている。

絶叫する晴彦。

○同・庭

ドラム缶で絵馬の化粧品や服を焼く

恵と絵馬。

恵「なんかもったいない。いいの？」

絵馬「違う自分になる時さ。私も、恵も」

○山道

ポストンバッグを持った恵が一人で歩いている。歩きながら上着は脱ぎ捨てて、タンクトップ一枚に。サンングラスを取り出してかける。そこに赤いフード付きレインコートを着た絵馬が合流。

絵馬「よくそんな格好で寒くないね」

恵「向こうの国は暑いじゃん」

絵馬「だからって今からやる？」

恵「あ、パスポートって大丈夫なの？」

絵馬、二人分のパスポートを見せる。

絵馬「よくできてるでしょ」

恵「だね」

と、インコが木々から飛び立って空に消えるのが恵の目に入る。恵は立ち止まって晴れやかな表情で空を見上げる。遠い上空に飛行機雲と、天使の羽の

ような雲が見える。

恵「さよなら」

絵馬の声「なにしてるのー。行くよー」

○空港の前

恵が視線を下ろすと、絵馬が入口前で待っている。

晴れやかな表情のまま、恵は前に向かって歩き出す。

入れ違いで空港から出てくる様々な人々は、空港を出るとマスクをつける。ボイスオーバーで新型コロナウイルス関連のニュースが流れる。

今は2020年2月。

(了)

